

◆ 新しい地理教育 ◆

令和4年度から、高校の地理歴史科の授業が大きく変わる。1994年度に必修となった「世界史」が必修科目からはずれ、新たに「地理総合」、「歴史総合」という科目が必修となる。そこで、いずれも「令和3年3月30日検定済」とある、「地理総合」の教科書5冊を読んでみた。

「主体的・対話的で深い学び」に示されるように、どの教科書の内容も子どもたちの能動的、主体的な学習態度を育成する方向が明確となっているように思う。例えば5冊中3冊では、自ら発表内容をまとめ、対面で実施する「ポスターセッション」の具体について、かなり詳細な取り上げ方がされている。残り2冊についても、「ポスターセッション」そのものの項目こそ見当たらないけれども、「地理的な情報を重ねて読み取る」力の育成を強く志向した内容になっていることがわかる。

仮説検証についての言及もあり、授業の進め方を工夫するなどして、自ずと対話型の学習に到達できるような記述となっている。中には作業学習をするための「透過シート」まで付いているものまであり驚く。そして、どの教科書もデジタル一辺倒になっていないことに少し安堵する。

昨年の秋に開催した茨城県高等学校教育研究会地理部の研究発表会では、現場のお二人の先生から、奇しくもこの「地理総合」で扱うことになる項目の大きな柱である「防災」関連の話題が提供された。お二人とも、ご自分の経験をもとに、いかに子どもたちに寄り添う地理教育が実践できるか、という視点で論考を進められていた点が印象的であり、またその視点が大変温かなものであったことをとてもうれしく感じた。

コロナ禍の弊害ばかりが俎上に登るけれども、例えばICT教育を推進するなかで、子どもたちの学びをとめない仕掛けが様々な場面で見られるようになっている。地理教育でも例外ではない。内容を精選し視点を転じながらプラスの側面を見出すこと、オンライン学習の可能性等々。「地理総合」の話題も含め、子どもたちの可能性を広げる「地理的な見方・考え方」の視点を自ら放棄することのないようにしたいものである。



(取手市内の県指定文化財・旧取手宿本陣染野家住宅)